



特集

緑と共生するまち

亀山市は、鈴鹿山系や鈴鹿川等源流域に代表される豊かな自然環境に恵まれたまちです。鈴鹿峠周辺は「鈴鹿」の地名の発祥の地と言われ、山々から流れ出た水は広範な鈴鹿川水系を形成し、その流域には貴重な歴史文化が築かれてきました。

このような中、本市は、「亀山市環境保全条例」や「亀山市鈴鹿川等源流域の自然環境と歴史的資源を守り継ぐ条例」を制定するなど、積極的に環境保全に取り組んできました。また、市西部の森林地域と閑宿周辺地域を鉱物採掘による破壊から守るため、市民の皆さんと鉱区禁止地域の指定に取り組んできた歴史もあります。さらに、近年は、生き物の多様性を守り、失われつつある自然を回復させる取り組みも進めています。

一方、林業従事者の減少や所有者不明森林の増加により、管理が行き届かない森林が広がり、森林が持つ多面的な機能が弱まりつつあります。また、野立て太陽光発電施設の増加に伴い、周辺環境への影響が懸念されるなど、さまざまな課題にも直面しています。

今日の私たちの暮らしは、先人たちが時代を越えて守り続けてきた豊かな自然環境の上に成り立っています。亀山の貴重な自然資源を保全・活用し、自然と共生する暮らしを次代に継承していくことは、今を生きる私たちの使命です。今回の特集では、自然との共生について考えます。

問合先

農林振興課農林政策グループ

☎84-5068

環境課生物多様性・獣害対策グループ

☎96-8588

亀山の緑の恵みにお気づきですか

亀山の森林のいま

日本は国土の約7割が森林に覆われ、亀山市も約6割が森林です。森林面積自体は、過去60年間ほとんど変わっていませんが、樹木は年々高齢化が進み、人間社会と同じように年齢構成や樹木構成といった質的变化への対応が健康維持に欠かせません。森林は、自然の力を利用して更新する天然林と植林される人工林に大別されますが、どちらもシカの食害によって更新がうまくいかず、伐採後に更新されない人工林も増えています。さらに、最近では、激甚化する気象被害や乾燥被害などにより、森林の荒廃も広がっています。

一方で、間伐不足や所有者不明による境界不明の森林の増加、太陽光発電施設の設置拡大など、人為的な要因による森林の管理水準の低下や質的劣化が問題になっています。



三重大学 名誉教授
松村 直人さん

Profile
昭和57年に名古屋大学農学部を卒業後、ドイツ・ゲッティンゲン大学で林学博士号を取得。平成12年に三重大学生物資源学部に着任。以来、亀山市での調査・研究や審議会活動などに携わり、現在、森林管理協議会委員を務める。専門は、森林資源調査や森林計画で、これまでに20カ国以上を訪問。

森林が果たす役割と未来への課題

健全な森林は、木材生産だけでなく、水源の確保、水質の保全、洪水・土砂災害防止、CO₂吸収など、多くの公益的な機能も果たしています。また、川の源流域として水源の森を形成し、海へと続く溪流エリアや生態系の保全にも貢献するため、森は海の恋人とも言われます。これらの機能は、個々の樹木の働きというよりも、集団としての森林、流域森林の保全が大きな課題です。点から面への展開、さらに、時間方向に100年、200年と継続すべき努力目標になります。また、森林は、多様な生物の生息基盤であるとともに、我々とも共生関係にあります。森林の質的劣化が進行すると生物多様性が失われ、結果として、私たちの生活にも悪い影響が返ってきます。

亀山の森へ行こう

日本人は、「水と空気はただ」と思っているとよく言われます。森林に代表される緑、私たちの日常に普通にあるものほど貴重な地域の宝ですが、地元の人々がその価値に気づいていないことがあります。

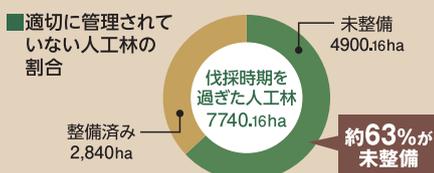
以前、アフリカからの研修生を案内した際、地元産材で作られた関中学校の立派なスギ柱に驚き、泳いだり、飲んだりできる川の清涼さに感動していました。ここまで教育に投資できる日本に対し、屋根のないがれきの間で子どもたちが学んでいる母国の現状に、絶望を感じ、ここまで来るにはあとどれくらいの成長が必要かと衝撃を受けていました。

亀山には、自然と親しむことができる施設や散歩ができる遊歩道が整備されています。まだ「山」と「里」の境界はありますが、さまざまな団体が森に親しむ企画も提案してくれ、自然を身近に感じる機会が広がっています。もっと積極的に森に入り、亀山の宝を実感し、市民と企業が協働してその価値を未来へつないでいくことが大切です。

亀山の森林保全の現状 さまざまな課題と今後の取り組み

伐採時期を過ぎた森林

伐採時期を過ぎた森林をそのままにすると、森林の過密状態が続き、その結果、樹木が細いままで成長できず、災害リスクの増大や生物多様性の低下などにつながるため、適切な管理が必要です。市では、管理が難しい所有者に代わり、間伐に取り組んでいます。人工林の約63%が伐採時期を過ぎても適切に管理されていない状況にあります。



所有者不明森林

所有者不明の森林は、相続登記の放置などで生じ、所有者の意向が分からず管理が滞り、間伐や再造林ができないことから森林の健全性が低下します。国土交通省の「地籍調査における土地所有者等に関する調査(令和5年度)」において、登記名義人の住所へ調査の通知が届かなかった土地の割合は33.4%に上り、所有者が不明な森林は、年々増えています。

所有者が不明な森林の割合

宅地	農用地	林地
20.8%	24.5%	33.4%

【資料】国土交通省
「令和5年度地籍調査における土地所有者等に関する調査」

自然環境に影響を及ぼす事業活動の抑制

近年、野立て太陽光発電施設の急速な導入拡大に伴い、全国各地で大規模な森林伐採や農地転用などが問題となっています。こうした中、市では、野立て太陽光発電施設の設置に関する基準や手続きを定め、適正な導入を図ることで、豊かな自然環境や生物多様性等を次世代に継承することなどを目的とする条例の制定に向けて取り組んでいます。



※写真誌イースト

環境と産業が調和した持続可能なまちづくりを進める

市では、森林経営管理制度により、森林所有者による適切な経営管理が困難な森林について、市が主体となり、林分調査や境界の明確化、森林整備などを行っています。また、NTT西日本株式会社三重支店と株式会社地域創生Coデザイン研究所と連携して、森林経営管理制度により森林所有者から管理を受託している森林を活用したJ-クレジット創出事業に取り組んでいます。

J-クレジット創出事業とは？

J-クレジット創出事業は国が認証する制度です

J-クレジット創出事業は、森林整備などによって増加した二酸化炭素の吸収量を、国が定めた共通ルールに基づき算定し、第三者の専門機関による審査を経て「クレジット」として認証する制度です。企業はこのクレジットを購入・活用することで、地球温暖化対策への貢献に加え、地域の森林再生を支える取り組みとして発信することができます。

私たちは、昨年、亀山市とJ-クレジット創出事業に取り組む協定を結びました。今後、森林経営管理制度により適切に手入れを行った森林を対象に、クレジットの創出を開始します。クレジットの販売収益は、森林整備へ還元され、放置森林の解消や災害防止、水源かん養、生物多様性の保全など、森林の多面的機能の向上と地域環境の保全につなげることができます。



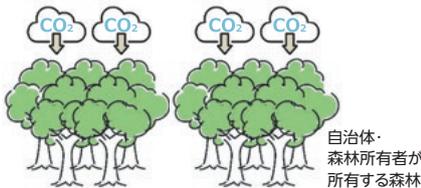
株式会社地域創生
Coデザイン研究所
研究主任
リードCoクリエイター
吉田 聡さん

J-クレジット創出事業イメージ

適切な施業を行った 森林がCO₂を吸収

吸収した事実・量を国に認証申請

国が認証して証書を発行



【画像提供】株式会社地域創生Coデザイン研究所

民間事業者の取り組み



株式会社諸戸ホールディングス
山林部門マネージャー
遠藤 宏之さん

未来へ受け継ぐ森づくり

当社は、山林を資産として所有するのではなく、未来へ受け継ぐものとして捉えてきました。日本人が山を敬い、その恵みとともに生きてきた自然観を重ね、長い年月の先を見据えて森を育てています。山を守り、川の流れを整える治山治水の取り組みを通じて、目先の利益にとらわれず、社会を静かに支え続ける。これが、当社の森林保全に対する基本となる考え方です。

130年にわたり亀山で森を育ててきた歴史

当社が所有する亀山・関の山林は、130年にわたり地域とともに育ててきた森です。樹齢120年の高齢林は保全を重視し、樹齢50年まで成長した区画では間伐を続けて健全な森づくりを進めています。また、伐採後に新たな木を植えて森を育て直す再造林にも取り組み、森林を次の世代へ受け継ぐ責任を果たしています。

100年後の亀山の森を見据えた取り組み

私たちは亀山の地で、木材生産だけでなく、水や土、人の暮らしと文化を支える山林の価値を高めるため、植えた木や若い森が健全に育つよう手入れを重ね、将来社会に役立つ太く大きな木を育てています。今後は、森林が持つ多様な魅力を多くの人に伝えるとともに、森の手入れや新たな植林を通じて、亀山の森林の価値を未来へつないでいきたいと考えています。



諸戸ホールディングスが管理する
中津山林(坂下地区)

鈴鹿川等源流の森林づくり協議会の取り組み

森林や水源などの地域資源を亀山市の“たからもの”として守り、次世代へ引き継ぎ、持続可能な地域をつくりたいという思いから、市民・事業者・学識経験者・行政が集まり、設立した団体です。みえ森と緑の県民税市町交付金を活用し、野登・坂下・加太の鈴鹿川等源流域3地区で、環境保全や自然に親しむイベントなど、さまざまな活動を行っています。



坂下地区 地域で循環できる森林づくり

雑木林の老木伐採から地域資源の活用までを一つの循環として考えた森林づくりや、地域資源のクロモジを使ったお茶づくり体験などを行っています。また、亀山市林業研究会と一緒に、新鮮なヒノキの香りや活用方法を体験するイベントを実施するほか、市民団体「魚と子どものネットワーク」と協力し、森と川のつながりを学ぶイベントも開催しています。

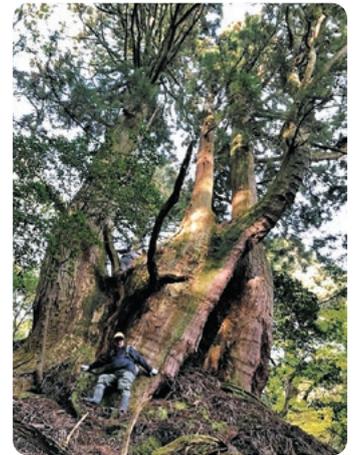


加太地区 加太の自然環境を未来へ

地域で育んできた温もりあるまちの景観を未来へつなぐほか、農林業や獣害対策を担う人を増やすため、地区の魅力を発信し、地区内外の人々の交流や地域活動がさらに深まっていくことを目指しています。その一環として、加太地区の森歩きやまち歩き、自然環境を体験できるイベントなどを開催しています。

野登地区 遠い昔から守られてきた原生林

野登山山頂の野登寺周辺に林立する巨大な杉について、分布状況やここまで大きく成長した理由を、令和7年度から地域住民や専門家とともに調査しています。その結果、「大杉」の本数や分布場所、山頂全体に原生的な樹林が保全されていることが分かりつつあります。今後、「大杉」が山頂で大きく生育した理由の解明や野登山山頂の原生林を守るための調査を続けていきます。また、「大杉」の魅力と保全の大切さを知ってもらうため、野登山山頂の四季折々の自然や動植物とふれあい、保全活動を体験するイベントを開催しています。



市の取り組み

子どもたちの森林保全の意識を高める

市の取り組みの一つとして、みえ森と緑の県民税市町交付金を活用し、鈴鹿森林組合や亀山木材産業協同組合と連携して、「森と木材のふれあい事業」を行っています。森林講座や木工教室を通じて、市内の小・中学生が森林の働きや木材への理解と関心を深めてもらうことを目的とし、令和7年度は、市内13の小・中学校で実施しました。

森林講座

森林の働きや林業について学びました。亀山の森林の様子も紹介しながら、地域の森林と自分たちの生活との関わりや森林保全の大切さの理解につなげています。



木工工作(小学生)・木工教室(中学生)

市産材を活用し、小学校では箸と箸置きを、中学校ではスツールを作りました。実際に木に触れ、香りを楽しむことで、木材が身近で活用されていることを実感できます。



生物多様性とネイチャーポジティブなまちづくり

森林は、動植物など多様な生き物を支える重要な場所で、生物の多様性があるからこそ、自然環境は豊かになります。しかし、世界中で生物多様性の損失が加速しており、その改善に向けて「ネイチャーポジティブ(自然再興)」という考え方が生まれました。自然を「守るだけ」でなく、失われた自然を積極的に取り戻し、気候変動対策や資源循環などあらゆる分野と連携しながら、社会や経済そのものを自然と共存できる形へと変えていくことが大切です。

自然の恵みの再認識と自然を大切にする価値観の共有



魚と子どものネットワーク
代表
新玉 拓也さん

Profile

名古屋大学大学院環境学研究科博士前期課程修了。環境省登録環境カウンセラー(市民部門)。在学中は琵琶湖流域で淡水魚調査や自然観察活動に携わる。その経験を地元で生かすため、2008年に市民団体「魚と子どものネットワーク」を設立。亀山市総合計画審議会委員、亀山市かわまちづくり協議会委員、亀山市環境未来創造会議共生部会部員、かめやま生物多様性共生区域認定審査委員会などを務める。



■ホームページ
<http://sakanatokodomo.web.fc2.com/>



気づかぬうちに失われつつある自然

亀山市では、鈴鹿川流域や里地里山に多様な生き物が残されているものの、その基盤となる環境は、近年大きく揺らいでいます。宅地化や道路整備、農地転用による生息地の減少・分断、外来種の侵入・拡大などにより、在来種の生存が脅かされています。また、気候変動による生物の分布の変化も生態系のバランスを不安定にしています。さらに、担い手不足による里地里山の管理放棄が進み、森林や農地の荒廃も課題となっています。こうした状況から、暮らしの身近にあった自然が、気づかぬうちに失われつつあることが亀山市の現状と言えるでしょう。

ネイチャーポジティブの視点で自然とともに生きる未来へ

亀山市の自然環境は、鈴鹿川流域や里地里山を中心に、多様な生き物と人の営みに関わり合うことで保たれてきました。生物多様性は、作物の受粉や病害虫の抑制、森林資源の循環など、食料や資源の安定供給を支える基盤となっています。また、森林や湿地、河川の生態系は、水源かん養や水質保全など、私たちの暮らしを支える重要な役割も担っています。こうした自然の働きを将来へ引き継ぐためには、地域の自然を守り、回復させていく「ネイチャーポジティブ」の視点で生物多様性の保全に取り組み、市民・行政・地域団体などが連携し、身近な自然と共生する地域づくりを進めていくことが重要です。

生物多様性保全と森林保全は「車の両輪」

亀山市の森林は、多様な生き物の働きによって健全な状態が保たれています。鳥や小動物による種子散布、微生物や昆虫による分解、土壌形成など、生物多様性は森林生態系を支える重要な基盤です。これらの働きが失われると、生態系のバランスが崩れ、病害虫の増加や森林の衰退・枯死の拡大につながるおそれがあります。また、自然の再生力が弱まり、森林の回復にはより多くの時間やコストが必要になります。生物多様性の保全と森林保全は「車の両輪」であり、両方を守る取り組みが地域の自然資源を将来へ引き継ぐことにつながります。そのためにも、まずは一人ひとりが自然の恵みを再認識し、地域の自然を大切にする価値観を共有していくことが大切です。

亀山市ネイチャーポジティブ宣言

市では、ネイチャーポジティブの実現に向けて、人と自然が共生する社会を目指すため、令和7年6月25日に「亀山市ネイチャーポジティブ宣言」を発表しています。

主な内容

- 市民や地域団体、事業者など多様な主体と連携しながら、亀山の豊かな自然を次世代に守り継ぐ取り組みを進める
- 生物多様性保全を重要施策とし、ネイチャーポジティブ経営の推進などのまちづくりとの両立に取り組む



亀山市ネイチャー
ポジティブ宣言



windsoil
代表
谷 慶子さん

Profile

windsoil代表。大学卒業後、自然学校で、自然の中での人づくりに長年取り組む。亀山に移住後、windsoil設立。アウトドアで「未来の日本のための人づくり」に尽力する人を表彰する「JAPAN OUTDOOR LEADERS AWARD 2025」で優秀賞を受賞。他にも、高田短期大学非常勤講師や市内外で活躍する自然保育コーディネーター、亀山里山公園「みちくさ」の管理人も務める。



Instagram
@windsoil

自然は、子どもたちにとって最高の学びのフィールド

子どもには、発達する中で体全体を使って成長しようとする力が備わっています。自然環境は、その力を最大限に引き出すための最高のフィールドです。たとえば木登りでは、腕や脚の筋力、体幹の安定が育つだけでなく、「どう登るか」を試行錯誤しながら実践することで、工夫する経験が積み重なります。登れた時の達成感からは、次にチャレンジする意欲が育まれます。このように、自然の中での活動は、子どもの心身の発達を多面的に支える大切な体験です。普段の生活では発揮されにくい力も、自然のフィールドに身を置くことで自然と引き出され、子ども本来の成長する力がのびのびと育っていきます。そして、そこには成長を見守り、ともに育ち合う大人が不可欠です。

in・about・forが人を育てる

環境教育には、子どもたちが自然と関わる力を育てるための大切な流れとして、「in・about・for」という3つの要素があります。まず、inは、自然の中に入り、五感で触れながら親しむ体験から環境への愛着が生まれます。次に about は、自然について知り、興味や関心を深めることで、生き物や環境を学ぶことによって知識を育みます。そして for は、環境保全など自然のために自ら行動することで、主体的な姿勢や問題解決力を育みます。

windsoilでは、この流れを大切に活動していて、自然に親しむ体験を中心とした「あおぞらen(乳幼児と保護者)」や、自然への理解を深める場として、稲作や森づくりなど地域の里山に根ざした活動を行う「やまのしずく(幼児から学童期までの親子)」を開催しています。今後は、地域の人とともに中学生から大学生までの若い世代にスタッフとして携わってもらうことで、主体的に自然を守る活動に取り組む次世代の育成にも力を入れていきたいと考えています。

官民連携による自然共生サイト「亀山里山公園」の整備

「亀山里山公園」は、市民が亀山の豊かな自然に触れ、親しむことで、自然への理解や将来にわたって自然を守っていく意識を育む場として整備したもので、環境省の「自然共生サイト」に認定されています。また、令和7年6月25日に亀山ビード株式会社と連携協定を締結し、里山公園の整備に協力いただいています。

亀山ビード株式会社の取り組み

特定外来生物の駆除活動

令和7年5~7月には、特定外来生物のオオフサモ(約2t)を駆除しました。



園内環境の整備・管理支援

園内の動植物に配慮しながら、来園者が安全に散策できるように、枝払いや倒木処理などを行っています。



亀山産の

木材製品を使う・買う

市産材を利用すると、その収益が地元の森林組合や林業者に還元され、森林管理を維持するための費用となります。亀山ブランド認定品にも、市産材を使った商品がたくさんあります。ぜひご利用ください。



相続登記を行う

相続登記を行うことで森林の所有者が明確になり、森林の適切な管理につながります。また、令和6年4月から相続登記は義務化され、期限内の手続きが必要です。



森林を守るために私たちにできること

かめやま生物多様性共生区域認定に応募する

かめやま生物多様性共生区域認定制度とは、多様な主体が守る自然豊かな場所を認定し、その活動を支援する制度です。詳しくは、市ホームページ(上の二次元コード)をご覧ください。**【募集期間】**4月1日(水)~6月30日(火)

登録のメリット

- 1 認定マークを表示でき、社会貢献の取り組みを対外的に示せます。
- 2 認定された活動について、市が情報発信を行います。
- 3 認定場所で生産された商品に認定マークを表示して販売できます。



今回の特集記事について感想をお聞かせください!

